

# 実践研究校の取組

小鹿野高校	7
春日部女子高校	11
坂戸高校	15
不動岡高校	19
本庄特別支援学校	23

# 令和2年度実践研究校の概要

## 埼玉県立小鹿野高等学校



### 学校基本情報

課程: 全日制 学科: 総合学科 生徒数: 200人

### 学校の特徴!

創立73年目。令和元年度から埼玉県立学校初となるコミュニティ・スクールとなる。小鹿野町と包括連携協定を結び「小鹿野高校魅力化プロジェクト」を行う。山村留学(試行)を実施し、親元を離れて高校生活を送る生徒も在籍。小規模だからこそ可能な少人数指導によりきめ細かな指導を行う。

### アクセス

西武鉄道「西武秩父駅」からバス38分 ※「小鹿野」下車

## 埼玉県立本庄特別支援学校



### 学校基本情報

種別: 知的障害 学部: 小・中・高等部 生徒数: 196人

### 学校の特徴!

・県立学校初、「コミュニティ・スクール」導入  
・キャリア教育の視点を踏まえたシラバスを用いた系統性のある教育  
・2020オリパラ教育実践推進校  
・本特版デュアルシステム: 地域社会の中で官公庁及び企業と学校が連携し生徒を育成する仕組み。 など

### アクセス

JR高崎線「本庄駅」からバス11分 ※「栗崎」下車

## 埼玉県立不動岡高等学校



### 学校基本情報

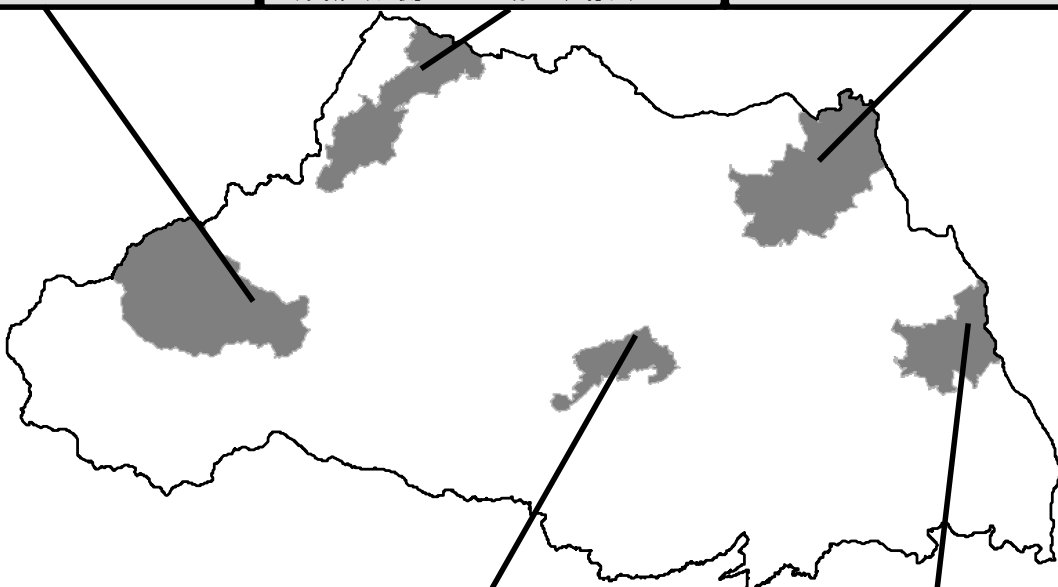
課程: 全日制 学科: 普通・外国語科 生徒数: 1,078人

### 学校の特徴!

・品格あるリーダー育成を目指した先進的な国際理解教育や豊富な海外研修  
・スーパーサイエンスハイスクール(SSH)事業を中心とした充実した科学教育  
・総合的な探究の時間や課題研究など探究活動を重視  
・全ての教科で発信力を重視した授業を展開

### アクセス

東武伊勢崎線「加須駅」から徒歩20分



## 埼玉県立坂戸高等学校



### 学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通・外国語科 生徒数: 1,077人

### 学校の特徴!

- ①「坂高スタイル」による学び…45分×7時間授業(週34単位)
- ②確かな学力を培うための教育課程…習熟度別、標準プラス1単位(国数英)授業
- ③国際理解教育…オーストラリア姉妹校との交流や各種行事
- ④社会や将来へつなげるキャリア教育…進路行事の充実、進路勉強会「子どもの進路を考える会」

### アクセス

東武東上線「北坂戸駅」から徒歩13分

## 埼玉県立春日部女子高等学校



### 学校基本情報

課程: 全日制 学科: 普通・外国語科 生徒数: 955人

### 目指す人物像!

- ①高雅な品格…凛とした品格のある女性
- ②凡事徹底…平凡なことを当たり前のこととして徹底・努力する女性
- ③恩送り…受けた恩を忘れず、さらに恩を他者や地域・社会に返せる女性
- ④nobles oblige…使命感と誇りを持って自ら活動する女性

### アクセス

東武スカイツリーライン「春日部駅」から徒歩17分

## 学校名（テーマ）及び主な取り組み

### 小鹿野高校（小鹿野高校魅力化プロジェクト～地域との協働による教育活動～）



- 7月 東京オリンピック竹あかりイベント「想火」
- 8月 3年総学「株式会社小鹿野高校」（～1月）  
秩父鉄道SL 転車台公園プレオープン記念イベント
- 9月 2年ビジネス実務「町観光PRチラシ製作」  
2年工芸「木育おもちゃ製作」（～11月）
- 11月 秩父鉄道長瀬駅前の竹あかり展示  
尾ノ内百景氷柱（1～2月）への準備

### 春日部女子高校（SDGsを軸にした地域企業・団体との連携・課題解決）



- ～8月 探究テーマの決定（1年）  
SDGsについて知る（2年）
- 9月 プレゼンテーションの方法を学ぶ（1年）  
講演会準備（2年）
- 10月 地域企業・団体の方による講演会（1・2年）
- 11月～ 地域の課題解決に向けた探究活動（1年）  
SDGsの課題解決に向けた探究活動（2年）  
※企業・団体の方から随時、アドバイスを頂く
- 1月 ポスターセッション（1・2年）
- 2月 論文作成（1・2年）

### 坂戸高校（総合的な探究—SDGsとともに—）



- 5月 「新聞でSDGs」ワークシート（通年）
- 6月 SDGsについて企業の取組から学ぶ
- 9～10月  
社会起業家の想いとお金の役割
- 10～11月  
社会問題からの事業アイデア（ワークショップ）  
分析と課題の深堀、発表
- 1月 ディベート

## 学校名（テーマ）及び主な取り組み

### 埼玉県立不動岡高等学校（SDGsの視点を加えた地域課題研究）



- 6月 地域課題研究の全体概要説明会
- 7月 JICAによるSDGs講演（全2回）  
第2学年の生徒（10地区、64班）が、  
SDGsと関連したテーマをそれぞれ設定
- 8月 各班フィールドワークによる情報収集
- 10月 地区別に分かれての中間発表及び中間評価
- 11月 中間評価を受けて、各班で検証作業
- 12月 最終発表に向けての準備
- 1月 最終発表及び研究のまとめ
- 2月 学年代表班による生徒研究発表会での発表

### 埼玉県立本庄特別支援学校（教育活動における学習支援）



- 8月 埼玉工業大学との打ち合わせ
- 9月 教職員向け研修会（プログラミング教育、VR、ARなど）
- 10月 } プログラミング教育の実践
- 11月 }
- 12月 }
- 3月（予定） 高等部バーチャル交通安全教室（自転車）

# 令和2年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

学校名：県立小鹿野高等学校

テーマ：小鹿野高校魅力化プロジェクト～地域との協働による教育活動～

## 1 教育効果・目的等

本校が所在する小鹿野町は、山林に囲まれた地域で、急激な過疎化が進んでいる。小鹿野町と小鹿野高等学校において、令和元年5月に包括連携協定を締結し、県立学校初となる学校運営協議会や町主導で進めている小鹿野高校魅力化プロジェクト推進委員会等での検討も踏まえながら、更に連携を深め、社会に開かれた教育課程の実現を目指している。

- ・生徒たちが通う小鹿野町について理解を深める
- ・問題解決力やコミュニケーション能力の向上
- ・情報活用能力や情報処理能力、プレゼンテーション能力の向上
- ・自己管理能力の向上
- ・主体的な学びの体現 ・充実感や達成感を味わい、自尊心を養う 等

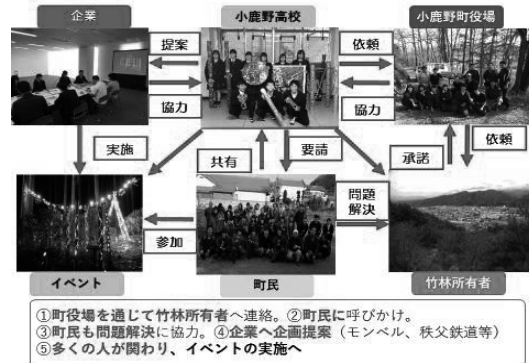
## 2 実践内容

### (1) 竹あかりプロジェクト

「竹あかり」とは、切り出した竹にインパクトドリル等を使用してデザイン穴を開け、その中にろうそく等を入れてデザイン穴から漏れる灯りを楽しむアート作品である。この取組は、高齢化や人口減少、環境保全等、町が抱える諸課題の解決にもつながり地域を活性化させるものとなっている。

(具体的な活動内容)

- ア 町の現状把握と課題解決
- イ 竹林管理
- ウ イベント企画運営・協力の依頼
- エ ワークショップの実施
- オ 広報活動
- カ 竹を山林に戻す



【竹あかりプロジェクト概要】

### 【取組1】「みんなの想火」～小鹿野町の未来を照らす～

- ①日時 令和2年7月23日（木）
- ②場所 本校敷地内
- ③参加者 生徒会、竹あかり同好会、小鹿野町おもてなし課・総合政策課、観光協会青年部（ちょこっともてなし隊）等
- ④実施内容 東京オリンピック開会式が行われるはずであった日の前日に、47都道府県の各代表が一斉に竹あかりを灯すイベントに、埼玉県の代表として参加した。生徒は竹あかりの製作や設置、当日の運営等を行った。町側は竹あかりの製作の他、当日の誘導や受付、消毒等の対応を行った。地区ごとに見学時間の指定を行い、回覧板等を通じて周知した。19:00 日没後点灯、生徒等高校関係者見学開始、19:30～21:30 町民限定で地区ごとに見学開始（ウォークスルー形式）



【みんなの想火】

### 【取組 2】SL 転車台公園プレオープン記念イベント

- ①日時 令和2年8月1日(土)
- ②場所 秩父鉄道三峰口駅 SL 転車台公園
- ③参加者 竹あかり同好会
- ④実施内容 三峰口駅にSL 転車台公園がプレオープンすることを記念して、鉄道体験等が行われるイベントに参加した。感染予防対策として、生徒は竹あかり設置のみの参加となった。



【SL 転車台公園】

### 【取組 3】地元中学校「One Action Day」における竹あかり製作指導

- ①日時 令和2年9月24日(木) 29日(火) 10月8日(木) 27日(火)
- ②実施内容 小鹿野町唯一の中学校である小鹿野中学校が今年度から開始した取組に、竹あかり同好会の生徒を指導者役として派遣した。竹あかりプロジェクトに関する説明を行い、竹あかりを実際に製作して自宅に持ち帰っていただいた。



【小鹿野中学校の生徒と指導者役の本校生徒】

### 【取組 4】町民対象の竹あかり製作ワークショップ

- ①日時 令和2年10月29日(木) 11月20日(金)
- ②場所 両神木作業所
- ③実施内容 竹あかりプロジェクト開始時から開催している。従来は製作した作品をイベントで使用していたが、今年度はイベントが自粛されている状況であるため、ワークショップ会場で点灯式を行った。「みんなの想火」を見学した方も参加するなど、少しずつ関心の和が広がっていた。



【埼玉県知事「ふれあい訪問」】

### 【その他】

- ・令和2年8月5日(水) 埼玉県知事「ふれあい訪問」発表
- ・11月1日(日) 29日(日) 尾ノ内氷柱ホース設置
- ・11月3日(火) ちちてつ秋まつりでの設置
- ・11月14日(土) 15日(日) 秩父鉄道長瀬駅前での設置
- ・11月18日(水) 19日(月) 福祉施設巨香の郷「秋季祭」での設置
- ・令和3年1月6日(水)～2月26日(金) 埼玉県庁への竹あかり設置及び県教育長への贈呈

### (2) 2年選択科目「ビジネス実務」『町観光PRチラシ製作』

### 3年選択科目「情報コンテンツ実習」『町観光動画製作』

「ビジネス実務」では、小鹿野町役場から提供していただいた観光写真を素材にし、Wordを使用して観光PRチラシを製作した。生徒の作品は、文書デザインコンテストに出品し(佳作)、更なる活用を検討している。

「情報コンテンツ実習」では、利用者の要求に応えられる企画と提案を行うために必要な基礎的な知識と技術を身に付け、授業ではプレゼンテーション実習等を行う。2学期前半から『小鹿野町の魅力をPRしよう』というテーマの下、小鹿野町役場や小鹿野町観光協会から様々な素材の提供や協力を得て、動画作成等の実習を行った。自分たちで撮影するためフィールドワークも行うなどして素材を準備した。動画は、1～3分の短編で、小鹿野町の魅力が感じられるように、生徒の出演やナレーション、字幕、キャッチフレーズを入れるなど工夫して編集するよう指導した。成果発表会には、小鹿野町役場の職員に来ていただき、約5分間の生徒発表に対し講評をいただいた。作品は観光甲子園へ出品した。



【生徒が作成した小鹿野町魅力 PR 動画】



【木のおもちゃ製作】

### (3) 2年選択科目「工芸Ⅰ」『木育おもちゃ製作』

①日時 2学期から活動（火曜5・6限目）

②場所 本校美術室

③実施内容 町産業振興課を通して地元木材の提供を受け、木のおもちゃを製作した。町が木育を推進していることもあり授業でも取り入れることとなった。

令和2年11月15日（日）には、東京おもちゃ美術館と小鹿野町によるウッドスタート宣言調印式が開催され、木のおもちゃ寄贈式には担当職員が出席し本校生徒の作品が小鹿野町へ贈呈された。

### (4) 3年総合的な学習の時間『株式会社小鹿野高校』（8～1月）

①日時 2学期（金曜5・6限目）

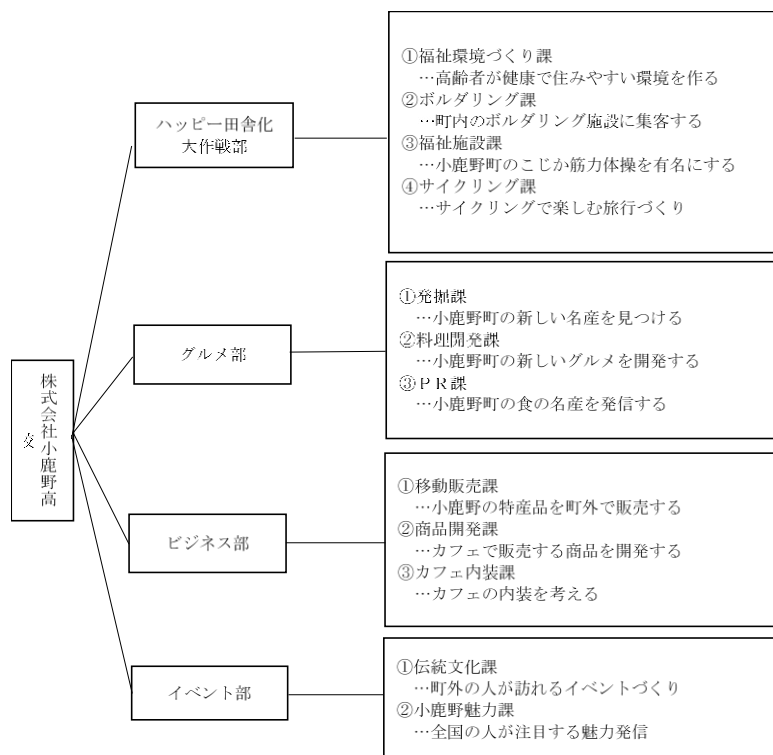
②場所 本校及び町内各所

③実施内容 「株式会社小鹿野高校」と題し、生徒たちが通う小鹿野町を題材にした探究活動等を行った。PDCAサイクルを経験させプレゼンテーション能力や仲間・地域の方々との関わり方等を身に付けさせた。生徒は小鹿野町が抱える諸課題に対し、グループごとに調べたり、アイデアを出したりし、各々が探究に取り組んだ。その過程で生じる明らかにしたい情報等に関しては、町が採用している地域おこし協力隊2名にコーディネイト役として関わっていただき、町の情報提供者や町担当者へつなげてもらうなどしていただいた。



【町からの地域食材  
(マコモダケ)の提供】

また、授業を行う際に来校していただき、職員との事前打合せを行った上で、生徒へのアドバイスや、町担当者や専門家への連絡の際の仲介などサポートしていただいた。



【生徒から町長へ取組説明】



【探究活動における発表】

### 3 実践の成果

少子高齢化が進む地域において、町に高校生がいること自体が貴重なことであり、学校への期待が寄せられている。小鹿野町は自然だけでなく、歴史・文化、産業等においても魅力的な要素が多く潜在的なものも多い。その発掘に高校生の視点が発揮され、地域の活性化にもつながる可能性もあり、学校にとっては探究活動の課題設定を立てやすいメリットがある。

竹あかりプロジェクトや各教科目での取組は、リアルな地域の課題を取り上げ、探究的な活動を行うことで、問題解決力やコミュニケーション能力の向上、更には自尊心の育成にもつながるものとなった。職員からは「学校以外の場で大人と話すことで、TPOを学ぶことができた」、地域からは「生徒の成長という大前提をブレてはいけない」、生徒からは「コミュニケーション能力が上がった。小鹿野町のことが分かってきた」などの意見があった。

<取材メディア等>

- ・ちちぶおもてなしTV (TV115 10月21日号)
- ・広報おがの (10月号～3月号の6か月連続掲載)、市報ちちぶ (10月号)
- ・読売新聞、埼玉新聞、埼玉よみうり、ちちぶエフエム等
- ・埼玉県キャリア教育実践アワード2021最優秀賞「株式会社小鹿野高校」

### 4 課題と今後の展望

#### (1) 課題

生徒の様子や学校の目標・方針等について地域と共通理解を図ることが必要である。あくまで生徒の成長の為であることを学校と地域がよく理解し、両者が目標を共有した上で活動を進める必要がある。十分な打合せを行うことで協働による教育活動を行いたい。

#### (2) 今後の展開

竹あかりプロジェクトを始め、本校では各教科目においても社会に開かれた教育課程の実現に向け取り組んでいる。これらの取組が学校全体のものとなり魅力的なものとなるよう、成果や課題を検証しながら、スパイラルアップを図っていく。



## 令和2度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

学校名：県立春日部女子高等学校

テーマ：「SDGsを軸にした地域企業・団体との連携・課題解決」

### 1 教育効果・目的等

本校は、今年度創立110周年を迎える女子校であり、高雅な品格を持ち、地域や国際社会のリーダーとなるべき人材の育成を目指している。新学習指導要領における総合的な探究の時間の導入に向け、平成30年度からSDGsを軸とした探究活動を展開してきた。

本事業では、地域社会及び国際社会で貢献できる人材の育成を目指し、自らの課題を検証し、解決していくためのプロセスを学ぶ機会を提供する。探究活動の本格実施にあたり、令和元年度に、外部機関との連携を推進する目的で、新たに支援連携部を設置した。その成果で、30以上の企業・団体と連携した探究活動が実現している。

### 2 実践内容

#### (1) 1学年【春日部市内の団体と連携した探究】

##### ア 目標・ねらい

地域社会及び国際社会で貢献できる人材の育成を目指し、自らの課題を検証し、解決していくためのプロセスを学ぶ機会を提供する。地域を例として探究活動を進める。

##### イ テーマ設定

8つのテーマ（商業、保育、食と健康、医療・看護、防災、子ども支援、障がい者福祉、外国人から見た春日部）から各クラスが1つ選び、消防署などの公的な機関やNPO法人など、市内の様々な分野の方々に協力をお願いした。



【NPOの方による講演】

##### ウ 取組の内容

9月 探究活動の手法を学ぶ

ビブリオバトルを通じプレゼンテーションを学ぶ

10月 連携団体によるテーマに関する講演会を通じ、身近な社会の様々な課題を知る

11月 各グループで、課題について情報収集・調査を行い、課題解決に向けた生徒自身のアイデアを創出する

1月 ポスターセッション形式で発表

2月 調べたことを基に、各個人で論文を作成



【ビブリオバトルでプレゼン練習】



【ポスターセッションの様子】

## エ 連携団体等

春日部市地域子育て支援拠点ぽっけのおうち、came came 30、NPO 法人かすかべ子ども食堂ひなた、特定非営利活動法人あかり、春日部市立看護専門学校、春日部市消防本部、春日部市整備部都市計画課 他

### (2) 2 学年【SDGs を軸に県内外の企業等と連携】

#### ア 目標・ねらい

1 学年で得た基礎知識を基に、SDGs を軸に据えて国内の様々な NPO 団体や企業と連携し、新たなアイデアを生徒が創出、提案することをねらいとする。

#### イ テーマ設定

SDGs の 17 の目標について学習し、自身にどの分野に興味があるのか気づかせる。企業や NPO 等の講演を基に、17 の目標から解決するゴールを決め、探究活動を行う。

#### ウ 取組の内容

- 10 月 各クラスを 2 つのグループに分け、生命保険会社、通販会社、劇団など、様々な企業・団体の方から、SDGs に関する取組について講演を聞く。
- ～12 月 講演を基に、SDGs の 17 のゴールのどれを解決するか絞り込み、総合的な探究の時間に生徒同士で継続的にディスカッションを実施。ディスカッションの内容は随時、クラウド上の会議室にアップし、企業・団体の方から常時閲覧・コメントを頂く。
- 1 月 新しいアイデアを案出してポスターにまとめ、ポスターセッションを行う。
- 2 月 調べたことを基に、各個人で論文を作成



【企業によるSDGsに関する講演】



【ポスターセッションの質疑には連携団体の方も参加】

## エ 連携団体等

ララガーデン春日部、ライセンスアカデミー、NPO 法人フリー・ザ・チルドレン・ジャパン、浦和レッドダイヤモンド(株)、花王(株)、(株)西武ライオンズ、公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン、(株)リクルートマーケティングパートナーズ、東武トップツアーズ(株)、(株)ファミリーマート、埼玉弁護士会、SMBC コンシューマーファイナンス(株)、(株)市川環境エンジニアリング、(株)G-P i t、一般社団法人 言語交流研究所 ヒッポファミリークラブ春日部、埼玉県教育委員会高校教育指導課 他

## 3 実践の成果

### (1) 1 学年における成果

本校の生徒は、県内の様々な地域から通学しているため、本校の所在地である春日部市周辺についての知識が少ない生徒も多い。市内で活動する様々な方々に春日部市の課題について講演していただき、地域社会へ興味・関心を持ち、地域の課題に対して、自分たち

ができることを考えることで、本校が育成を目指す地域社会に貢献できる人材へ一歩を踏み出す一助となっている。一昨年度の「町おこし」のテーマでは、本校のシンボルでもあるヒマワリの花をモチーフに創作し、クラス内投票で一番支持されたものが実際にカードとして採用され、市内に配布されたことは、生徒の社会参画の意識の向上にもつながっている。

1月のポスターセッションでは、自分たちでポスターセッションを行った2日後に、2年生のポスターセッションを見学した。先輩たちの発表の様子を見ることで、自分たちのプレゼンテーションの課題を発見し、論文作成や翌年の探究活動につなげることができた。



【1年生を聴衆に加えてのポスターセッション】

## (2) 2学年における成果

1学年で学んだ探究の手法を活用し、2学年ではさらに、探究活動を深めていくが、折に触れ、連携団体の方から助言をいただくことで、より実態に即した課題解決を目指すアイデアの案出につながっている。1月のポスターセッションでは、緊急事態宣言下にも関わらず、連携団体の方も非常に多く参加していただき、発表に対するフィードバックやアドバイスをしていただいた。

今年度はコロナウイルス感染症の拡大により実現できなかったが、昨年度、浦和レッドダイヤモンズの練習グラウンドや試合に招待していただいた班では、「女性の観客をもっと取り込むには」「企業のSDGsへの取組をアピールするには」等の課題を、他人事ではなく自分事として受け止めて情報収集し、グループで話し合いを重ねることができた。その結果、生徒が創出したアイデアが採用され、浦和レッドダイヤモンズのHPに掲載され、生徒も達成感を得ることができた。

## (3) 全体を通じた成果

- 正解が何であるのかが明確ではなく、一人では解決困難な課題も、他者と協働し対話を重ねることにより納得解や最適解へとたどり着く体験ができた。コロナウイルス感染症の影響で、生徒同士がコミュニケーションをとる機会が非常に少なかったが、コミュニケーション能力の向上や協調性の育成につながっている。
- 自分たちの考えや意見を他者に向けて発信することにより、発信力が身についてきている。連携する企業や団体の方からも多くのフィードバックが与えられたことにより、思考力の深まりにもつながっている。
- 自分たちの身近なところに課題があることを生徒自身が発見でき、その課題を解決することが、社会全体の課題を解決することに繋がると気づくことができた。探究し続ける姿勢を涵養できた。

## 4 課題と今後の展望

### (1) 課題

今年度はコロナウイルス感染症の拡大防止のため、2か月以上の臨時休業期間があり、学校再開後もグループワークの制限により、大きな計画変更を余儀なくされた。特に、夏季休業期間を利用しての現地調査や連携団体を訪問してのフィールドワークができなかった。やはり自分の目で現場を見て、肌で実感すること、最前線で課題に取り組む方と意見交換をすることは実態に即した課題解決を目指す上で必須であると考えます。

生徒の課題としては、1・2年生が探究活動のまとめとして、論文を作成しているが、ローマ字でのパソコン入力が苦手な生徒が多かった。本校では情報科目の学習は3年次のため、カリキュラムマネジメントの必要性を感じた。また、口語的な言語表現が少なからず見られ、論文に磨きをかけるための表現指導にも今後は時間を割くことが必要である。入試制度改革により、高校時代の探究活動がよりクローズアップされてきている。テーマ設定においても教員が提示する現方式から、生徒が課題を発見し、自分自身で論文にまとめる形まで進めていきたい。

教員側の課題としては、学年教員団の連携が欠かせないことを痛感した。始動したばかりの探究活動について、教員の理解に温度差があると、生徒への目的の伝え方や支援の深浅に差が生じかねない。生徒の探究が教科横断的であるなら、教員もまた教科や経験を超えたところで連携し、生徒の学びを支えたい。若手の教員はともかく、「主体的、対話的で深い学び」を経験せずに教壇に立っている教員は多い。大人の側の意識改革が求められていると感じる。

## (2) 今後の展望

今年度、新型コロナウイルス感染症の影響で企業やNPO等との連携に課題があった反面で、オンライン会議システム等の活用により、講演会や意見交換の機会は設けることができた。WIN-WINプロジェクトのフォーラムでも、島根県の高校生や企業の方と意見交換を行うことができたが、物理的な空間を埋める大きな手段であり、他県や世界の様々な人々と意見交換を行う有効な手段となり得る。

本校は、現在、ユネスコスクールの認定に向け、申請を行っている。ユネスコスクールに認定されれば、世界中のユネスコスクールとも交流の場が広がることから、実地での活動とオンラインでの活動を有機的に組み合わせることにより、より深い探究活動につなげていきたい。



【オンライン講演会】

## 令和2年度 学校地域 WIN—WIN プロジェクト 実践研究校

学校名：県立坂戸高等学校

テーマ：総合的な探究～SDGsとともに～

### 1 教育効果・目的等

#### (1) 現状と課題

本校は2019年度1学年より「総合的な探究の時間」の指導の充実を図ることを目指し、当該学年の中に「総合的な探究の時間係」を立ち上げた。学年主任の他3名の教員が担当し、学年の「総合的な探究の時間」（1単位火曜日7限）の指導計画の作成と運営を行っている。

#### (2) 目的

学校外の社会人と関わり、多種多様な価値観や視点を取り入れ、生徒が社会の抱える様々な課題を知る。社会課題を自分事と捉え考察し、その解決に向けたアイデアを創出する力を育む。

#### (3) 期待される教育効果目的

- ・多種多様な社会人の意見に触れ、社会課題を多角的に見て自分の意見を抱くきっかけとなる。
- ・身近な生活環境に目を向け、様々な他者の視点を想像し、課題意識を持つきっかけとなる。
- ・活動を通して、自らが社会に対してどのように参画できるかを考えることで、進路意識の向上を促す。
- ・他者のアイデアを尊重し、また積極的にアイデアを提案する力を養う。

#### (4) 方針と計画

はじめに「生徒にどのような経験を与え、どのような力を育てていくか」をルーブリックにまとめ、生徒に提示した。

高めたい資質	S	A	B	C
自ら考え行動する力(課題発見力・課題解決力)	課題の内容を十分に理解して、自分事化している。また、課題解決に向けて複数のアイデアを持っている。	課題の内容は理解しているが、課題解決に向けて具体的な行動をとろうとしている。	課題の内容の理解はしているが、課題解決に向けた行動が場当たり的である	課題の内容の理解が不十分で、課題解決に向けて表面的な行動しかとれていない。
根拠をあげてわかりやすく伝える力(表現力・発信力)	具体的な事例や根拠(資料)をあげて、豊かな表現力でわかりやすく伝える。聞き手の立場に立って、自信を持って伝えている。	手元の資料を見ながら、具体的な事例や根拠をあげて伝えている。相手に伝える意思を持っている。	相手に伝える意思を持っているが、具体的な事例や根拠は用意した原稿を読んで伝えている。	具体的な事例や根拠(資料)があげられず、わかりやすく伝えられない。自信がなく、相手に伝える意思が希薄である。
物事を多角的にみる力(思考力)	課題の背景を理解し、複数の視点から課題を本質的に捉えている。課題に対して自分の意見を持ち、具体的な解決策を導き出している。	課題の背景を理解し、課題を本質的に捉えている。課題に対して自分の意見を持っているが、具体的方策に欠ける。	課題の背景を理解している。課題に対して自分の意見を持っているが、一方的である。	課題を捉えようとしているが、表面的で視点が定まらない。
共に学びあい、高めあう力(協働力・共生力)	メンバーのアイデアを積極的に引き出そうとしている。チームを盛り立て、誰一人困らないような行動をとっている。	メンバーのアイデアを引き出そうと努力している。チームを盛り立てる気持ちを持ち行動している。	メンバーのアイデアを引き出すことに困難を感じている。チームを盛り立てようという姿勢は見える。	メンバーのアイデアに耳を傾けられない。チームを盛り立てる具体的な行動や態度がとれていない。

1学期に（株）ファミリーマートとの連携授業が企画され、ファミリーマートのSDGsに対する取組についてオンラインでご講演をいただいた。また、新聞を活用して社会に目を向ける活動として「新聞でSDGs」と題したワークシート作成を定期的実施した。2学期（9月～11月）は博報堂との連携授業を以下の内容で実施した。

No.	日付	タイトル	内容・ねらい	形式
1	9/8 (火)	社会起業家の想いと 事業内容 (講演：Dari K)	当事者による「社会企業家」の実際についての講演。起業すること・その一歩手前の社会に出ることについての視点を持つ。	生徒：教室 担当：来校無し オンラインでの講演 (zoomを利用)
2	9/15 (火)	お金の役割と ソーシャルインパクト (講演：西日本シティ銀行)	社会に出て働く、また起業するうえでの「銀行とお金」の存在についての講演。自分事として働くことや起業することとお金の関係について考えるきっかけにする。	生徒：教室 担当：来校無し オンラインでの講演 (zoomを利用)
3	9/29 (火)	社会起業家になってみよう①	社会について自分の問題意識を見つめ直し、事業アイデアとして考えるワークショップ。	生徒：教室 担当：来校無し オンラインでの講演 (zoomを利用)
4	10/1 (木)	社会起業家になってみよう②	チームでアイデアのブラッシュアップを行っていく。また、第5回のプレゼンテーションを見据えた発表準備とする。	各クラス 担任より
5	10/27 (火)	自分たちで考える 事業アイデアの構想	4回目より開始した事業アイデア制作の発表・共有を行い、自らのアイデアや構想を他者に表現する活動とする。	発表会形式

## 2 実践内容

### 2学期（9月～11月）の博報堂との連携授業

#### (1) 第1回

博報堂からの紹介により、株式会社Dari Kの河村氏よりオンラインでご講演をいただいた。生徒は各クラスで着席し、黒板に投影されたzoom画面からの話やスライドでの説明を受けた。生徒はワークシートに公演内容をメモで取りながら講演を視聴した。

講演の内容はSDGsに関連して、「フードマイレージ」や「フェアトレード」、「自然共生や地域共生の観点」などについての企業のリアルな実践内容であった。



【黒板に投影された講演を聞く様子】

## (2) 第2回

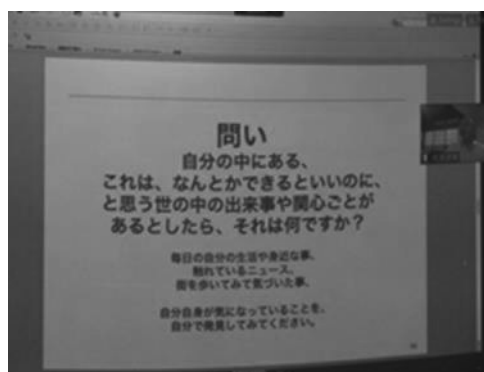
博報堂の紹介で、西日本シティ銀行からオンラインでご講演をいただいた。生徒は第1回と同様、各クラスで着席し、黒板に投影された zoom 越しの話やスライドに目を向けながら講演内容を記録した。

## (3) 第3回

博報堂から「自分の中にある、『これは、何とかできるといいのに』と思う世の中の出来事や関心事があるとしたら、それは何?」と問いから、授業が始まった。生徒は関心事を各々に書き出した紙を胸に掲げ、同類の関心を持つ数人でグループを組み、社会課題について語り合った。授業の最後に「自分たちが解決したい社会課題と、それが解決された後の世界の様子」について一枚のシートに書き出した。授業後、第5回の報告会に向けてどのような機会を設けていくかについて再検討し、1時間授業時間を追加することにした。



【第2回 黒板に投影された講演を聞く様子】



【第3回 黒板に投影された博報堂からの問い】

## (4) 第4回

自分たちが関心を寄せた社会課題への理解を深めるために、「5W1H分析」と題したワークを行った。「Why」を除く5WIHの視点で、取り上げた社会課題の輪郭を明らかにし、解決すべき事象や状況がより具体的に設定できることを目的とした。具体的な方法として、フィッシュボーン分析の形式を採用したワークシートを用いて、取り組みやすくなるよう工夫を行った。

## (5) 第5回

第4回では漠然とした社会課題に対して理解を深めるために、より具体的な状況設定を試みた。次の段階として、「なぜなぜ分析」と題し、その社会課題が「なぜ起こってしまうのか」、「なぜ解決しないのか」を追求するワークを行った。

## (6) 第6回

チーム全員が黒板の前に立ちこれまでの経緯と取り上げた社会課題の本質、その課題が解決された後の展望について発表を行った。発表は、第3回から第5回のワークで用いたワークシートを清書し、それを黒板に投影しながら行った。



【ワークシートを投影して社会課題の「核」紹介する様子】

### 3 成果

- 第1回の講演では、高校生活で自分では辿り着かないような様々な社会課題の実際について考えることができた。また、講演いただいた河村氏ご自身の経験から、職業観や起業への想いについてお話しいただき、生徒が学校の外の社会に目を向けるきっかけになった。「生きがいとは何か」について人生観と共にお話をいただき、生徒は積極的にメモに取っていた。
- 第2回の講演では、西日本シティ銀行から、銀行の役割、起業と融資の実際、の2点についてお話をいただいた。SGDsを軸に社会課題の解決に取り組むことが、融資を受けるための重要な要素になっているという内容は、実社会のリアルな現実であり影響を受ける生徒も見られた。一方で、「社会課題を自分事にするためには、まだまだ知らないことが多すぎる」といった感想を持つ生徒も見られた。
- 第3回の「問い」に対して生徒が出したものは「ごみのポイ捨て問題・差別問題・少子高齢化・海洋汚染」などの課題が多数であった。発問に対して、自分が実際に危機意識を感じていることを提示する生徒と、大概に言われる課題にとどまってしまう生徒の二極化の傾向が見られた。
- 第4回、第5回の調査・考察の時間では、スマホなどを活用し、新たな知識や実態を知ることができた生徒も見られた。一方で、既有知識のみでワークが進んでしまい、新たな気づきに到達できないグループも見られた。問いを立てる想像力を養うために、課題への十分な知識と理解が必要であることを生徒、教員共に強く感じた。
- 第6回の報告会では、課題の捉え方をチーム間で共有することができた。扱う課題が近いものであっても、深堀りの経緯や社会課題の「核」の捉え方の違いを互いに認識し、複数の視点で課題を理解するきっかけとすることができた。

### 4 課題と今後の展望

- オンラインでの講演を視聴する形式は、学外と連携しやすいが、講演形式よりも内容が伝わりづらくなってしまう傾向にあることを感じた。また、講師からは「生徒の様子の把握が難しく生徒の実態を十分に把握しなければ講演内容を考えることが難しい」との指摘もあった。一層丁寧な打ち合わせを行い、効果的な講演の実現を目指さなければならない。
- 社会課題に目を向ける学習を行い、生徒が社会課題をいかに“自分事”として捉えていくかが最も大きな課題である。高校生が社会課題に危機意識をもち解決することを目指すには、その課題に対してしっかりと知識や実態のインプットが行われ、多様な経験を経る必要がある。本校で行っている「新聞でSDGs」と題した新聞切り抜きのワークなどの時間をさらに充実し、社会で起きている様々な出来事に触れ、自分もその一員であることを感じていく中から、社会課題を「自分事」として捉える態度が芽生えるのではないかと考える。
- 1単位（火曜日7限1コマ50分）と限られた時間の中で、生徒に知識や経験を与え、身の回りに目を向け意見を持つためには、1年次と2年次の2年間に渡った連続的な指導が必要である。そのために、カリキュラム・マネジメントとして、組織的な取組を図っていくことが必要である。また、現在本校が既に取り組んでいる教科指導、進路指導、部活動指導、各種行事などに関連付けて実現するのは、生徒教員ともに負担が大きく、実施には課題がある。優先順位や取組の濃度にバランスをとり、進めていかなければならない。



## 令和2度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

学校名：県立不動岡高等学校

テーマ：SDGsの視点を加えた地域課題研究

### 1 教育効果・目的等

#### (1) 地域課題研究の目的と事業参画の経緯

スーパーグローバルハイスクールに指定された平成27年度から、第2学年の生徒を対象に総合的な探究の時間（通称Fプラン）「地域課題研究」を実践している。目的は以下の通りである。

「自らが居住する地域の課題についてグループで研究し、解決策を提案することを通じ、以下4点を有するリーダー的人材を育成すること。

- ①異なる価値観を受容し、新たな価値観を創造できる人材
- ②自ら課題を発見し、他者と協働しながら解決する人材
- ③自らが生まれ育った地域や文化に対する深い理解と誇りを有する人材
- ④異なる価値観を持つ他者との摩擦を恐れることなく、調整できるタフさのある人材

本校のFプランは分掌（Fスタディ部）を中心に、各学年と連携をして実施している。地域課題研究開始当初は加須市を対象に課題研究を実施していたが、生徒の通学範囲が広がったため平成30年度から地域別（10グループ）の課題研究に変更した。そして今年度、JICA東京と連携し、SDGsの視点を加えることで研究の深化を目指すために本プロジェクトに参画した。

#### (2) 特徴、工夫した点

本校のFプランで最も大切にしているのは、フィールドワーク（以下FW）を設定していることである。インターネットや新聞などで入手した情報だけでは知ることができない、直接訪問することで得られる情報を活用することで研究に深みを持たせることができると考えている。

今年度は新型コロナウイルスの影響で、4、5月は休校となり、夏季休業も短くなってしまったが、FWは感染症対策をしながら全ての班が実施した。

### 2 実践内容

#### (1) 全体計画

- 4、5月の臨時休校に伴い修正した主な計画を以下に示す。
- 6月 地域課題研究の全体概要説明会、グループ決め
  - 7月 JICAによるSDGs講演（全2回）、テーマの決定
  - 8月 夏季休業中、各班FWによる情報収集
  - 10月 地域別に分かれての中間発表及び中間評価
  - 11月 中間評価を受けて、各班で検証作業
  - 12月 最終発表に向けての準備
  - 1月 学校地域WINWINプロジェクトフォーラム参加（生徒2名、教員1名）  
学年内最終発表及び研究のまとめ
  - 2月 学年代表班による生徒研究発表会での発表

## (2) グループ分け

生徒の居住地の人数を考慮しながら、以下の10グループに分けた。各グループをさらに5、6名1班の単位に分け、全部で65班の編成となった。

グループ	地域	グループ	地域
1	さいたま市、伊奈町	6	久喜市（栗橋以外）
2	羽生市、群馬県	7	宮代町、幸手市、杉戸町、春日部市
3	越谷市、草加市	8	熊谷市、行田市、深谷市
4	加須市	9	鴻巣市、北本市、上尾市
5	久喜市（栗橋）、古河市	10	白岡市、蓮田市

## (3) JICAによるSDGs講演

7月1日と8日、2回にわたってJICA東京の方に講演をしていただいた。1回目はSDGsの概要、2回目は探究活動の実施方法についてSDGsを絡めてお話いただいた。



【JICA東京によるSDGsの概要】

## (4) 研究テーマの決定

2回の講演を踏まえて、各班に研究テーマを決定させた。SDGsの17テーマに関連させることを条件とした。例をあげると「紅あかを使った町おこし」、「羽生市の水害対策」、「健康増進！加須徒歩ラリー」と例年に比べ多様なテーマが挙げられた。

## (5) フィールドワーク（FW）

夏季休業が短くなり、生徒はリモートFWやオンラインFWなど工夫をしながら全班実施した。中には、冬季休業中や1月にFWを行っている班もあった。

## (6) 中間発表

10月21日に実施した。例年は各班模造紙でポスターを作成し、生徒はクラスを自由に移動し発表を聞いていたが、今年度はA4版1枚に概要をまとめ、PDF化したものを、Googleクラスルーム（以下GC）を活用し生徒に配信し、生徒の移動は途中で1度のみとした。



【中間発表で教育長の質問に答える生徒】

また、各班の中間評価は、GCにGoogleフォーム（以下GF）を活用した評価表を配信し、発表ごとに評価する方法を採用した。

## (7) WINWINプロジェクトフォーラム

1月13日に実施された。当日は最終発表に向けた準備の会だったため、教員1名、生徒2名でリモート参加した。各グループには、埼玉県立高校の教員・生徒、県教委の方、埼玉県が連携している島根県教委の方、島根県立高校の教員・生徒、民間企業の方など多様な方が配置されるようなグループに分けられていた。「良い学びを実現するには」をテーマに世代を超えた話し合いができ、参加した教員、生徒とも大変満足できる内容だった。

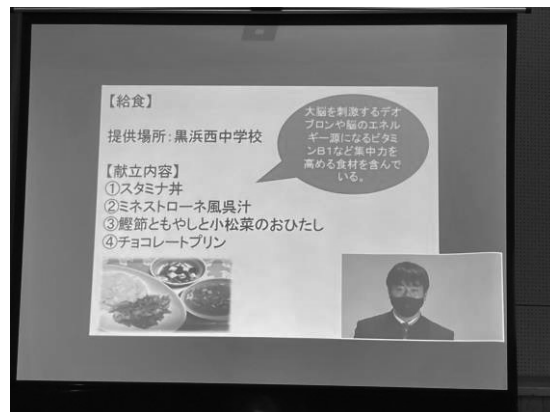
### (8) 学年最終発表

1月26、27日に実施した。最終発表の生徒評価については、当初実施予定ではなかったが、生徒から発表を聞いてもらった人からのコメントが欲しい、という要望があったため、急遽、紙による生徒評価を実施した。

### (9) 生徒研究発表会

2月3日に実施した。例年はパストラル加須で1、2学年の生徒が一堂に会して実施していたが、感染防止のため不動岡ホールで発表し各クラスへのライブ配信という形を採った。質疑応答は、事前にGCに質問事項を書き入れるスプレッドシートへのURLを配信し、発表中に入力することで多数の質問を受けられるように工夫をした。

2年生の地域課題研究からは、蓮田・白岡グループの班が「郷土を深く感じられる給食献立を考えよう！～食品ロスをなくそう～地産地消の給食～」をテーマに発表した。



【発表会は各教室へのライブ配信で実施】

## 3 実践の成果

### (1) SDGsへの理解の深まりと持続可能な解決策

JICA東京の方の講演時に、SDGsについての理解を生徒に聞いた結果が下表のとおりである。半数近くの46%があまり知らない状況であった。

初めて聞いた	ロゴは知っているけど内容は良く知らない	SDGsに関連する雑誌などを読んだことがある	周りの人に17のゴールを説明できる	17ゴールを説明できて、生活の中で行動している
9%	37%	52%	2%	0%

事後にアンケートを実施してはいないが、各班のテーマ設定、課題への解決策、発表会でのプレゼンテーションなどを見ると明らかにSDGsへの理解が進んでいる。また、SDGsの17のテーマをそれぞれの地域の課題と関連付けることで、以前よりも持続可能で実現可能な提案を考えている班が増えた。さらに、当初の課題をFWや研究をしていく過程で、新たな解決法を発見するなど発想も柔軟になっていた。

一例を挙げると、生徒研究発表会にも参加した、蓮田グループの「食品ロス」をテーマにした班は、FWで中学校に行き、話し合いをしていく中で、地産地消の給食だけでなく、中学生のキャリア教育も人口減少対策には有効であることに気づき、高校生活に関する授業を実施することになった。



【FWで中学生に学校生活について話す】

## (2) ICTの活用による負担軽減や資源の有効活用

本校では臨時休校中の4月当初に、全生徒にGCのアカウントを配布し、その使用法を各学年集会で伝達した。そのため、生徒は6月の学校再開以降も、GCで話し合いや情報の共有を行い、休校中の遅れを取り戻すべく努力をしていた。

また、Fプランで使用する資料やアンケートなどもGCやGFを活用することで、担当教員の準備負担の軽減や、紙の消費を減らすこともできた。

## (3) 生徒・教員の変容

### ア 生徒の変容

話を聞く姿勢が目に見えて変化した。本校では、元々意見交換をする機会は普段の各教科の授業でも設けていたが、今年度は特に、他者の意見を受け入れる態度（受容性）、他者の意見を否定せず、どうすると改善できるかを話そうとする態度が見られ、課題に対して限られた時間でより良い解決策を導こうとしていた。

### イ 教員の変容

各教科の授業でもSDGsを取り入れた授業を展開する教員が見られるようになった。また、SDGsの17のテーマがそれぞれ関連していることを知ることで、他教科と関連させて授業中に話をする教員が増えてきた。

## (4) JICA東京の事業の周知

JICAというと青年海外協力隊というイメージが多かったが、国際理解教育の視点で学校に支援する事業を行っていることを生徒・教員も知ることができた。

## 4 課題と今後の展望

### (1) 課題

#### ア コロナ禍での連携企業とのやり取り

JICA東京が東京にあるため、対面して話し合う機会を設けられなかった。オンライン会議は不慣れで合ったため、共通理解を得ることに苦心した。今後、講演をより良いものにしていくために、教員のICTスキルの向上は必須と考えている。

#### イ 1学年のFプランとの連続性

昨年度まで、1学年のFプランは、企業に課題をもらいその問題を解決していくことで探究の基礎的手法を学んでいた。2学年の地域課題研究との連続性を意識した取組を実施する必要がある。

### (2) 次年度以降への展望

本校は令和4年度から学科再編を行い、Fプランを中心とする探究活動の更なる深化を目指している。以下現時点で構想していることを2つ挙げる。

#### ア 課題研究基礎講座の実施

今年度の2学期から、1学年において課題研究の基礎を学ばせる講座を試行している。2学年の地域課題研究へスムーズに連携できるよう、探究活動の基礎スキルを身につけられる内容にしていきたい。

#### イ SDGsを関連させた授業の展開

SDGsの17のテーマを、地域課題研究はもちろん各教科の授業で積極的に取り入れ、教科横断的な授業を積極的に展開したい。

## 令和2年度 学校地域WIN-WINプロジェクト 実践研究校

学校名：県立本庄特別支援学校

テーマ：教育活動における学習支援

### 1 教育効果・目的等

本校職員にとどまらず、教材開発に係る専門家や専門を学ぶ学生から広くアイデアを集め、教材を開発することで、指導・支援の充実化を図る。また、大学が本校の教育や児童生徒の様子を知ることにより、特別支援教育の理解と、今後の連携、協働の充実を図る。

### 2 実践内容

#### (1) 教職員向け研修会の実施

特別支援学校におけるプログラミング教育や最新技術を活用した教育を探るにあたり、本校近隣の埼玉工業大学の先生による研修会を行った。

研修の内容は以下の通りである。

- 「プログラミングを通して考える力をつけるとはどういうことか ―ビジュアルプログラミング Scratch の事例紹介も含めて―」

講師：同大学工学部 情報システム学科 准教授 関口 久美子氏

- 「ヒューマン・コンピュータ・インタラクションの事例集とその要素技術」

講師：同大学工学部 情報システム学科 教授 鯨井 政祐氏



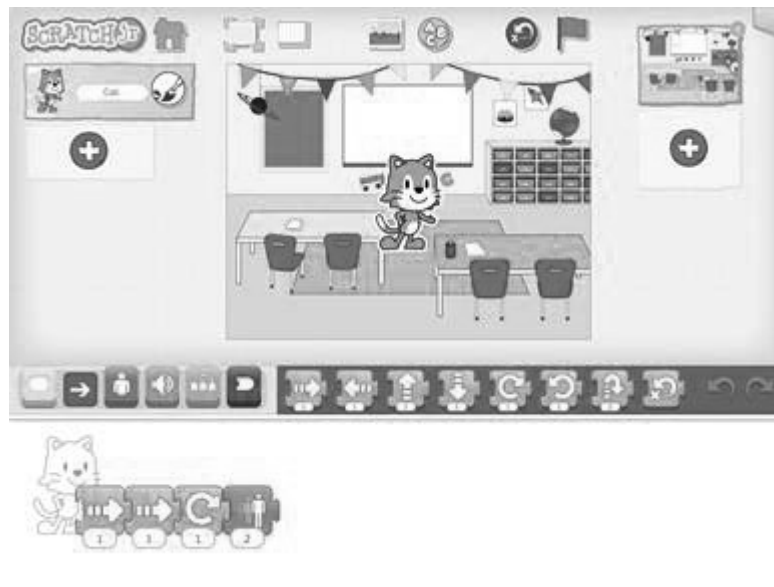
【教職員向け研修会の様子】

#### (2) プログラミング教育の実践

(1) で記載した研修では、「Scratch」といった PC やタブレットの画面上でアイコンやブロックを操作する「ビジュアルプログラミングタイプ」の紹介があった。それを受けて Scratch、Scratch Jr. を使った実践や、以前から取り組んでいる「プリモイズ キュベット」「コード A ピラー」を使った実践に取り組んだ。時間の許す限り、関口准教授の指導、助言を随時受ける予定である。



【プリモイズ キュベツト】を使った小学部での実践】



【iPad 向けアプリ「Scratch Jr.」の画面】

### （3）バーチャル交通安全教室の実施（3月8日に実施予定）

本来であれば埼玉工業大学と教材を共同開発し、実践を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により本校および大学の授業に影響を及ぼすため、実現が困難となった。

また、本校では例年であれば警察による交通安全教室を行っていたが、これも中止となり本校の生徒指導に影響を及ぼす恐れがあった。さらに今後コロナ禍の有無に関わらず、最新技術を使った教育の可能性を探ることも必要であり、大学等の教育機関では難しいが、企業や外部団体で行っていないかどうかを探っていた。そこで、VR等を使用した交通安全教室を行っている、財団法人日本交通安全教育普及協会と打ち合わせ、3月8日（月）に教室を行う予定である。後日埼玉工業大学と内容を共有する機会を持つ。



【自転車交通安全教室のイメージ(財団法人日本交通安全教育普及協会 HP より)】

### 3 実践の成果

#### (1) 教職員向け研修会の実施

有志の教職員約40名が参加した。前半は、Scratch を中心に関口准教授の実践紹介があった。多くの教職員が「プログラミングで学ぶ」という言葉に反応し、今後の教育活動におけるプログラミング教育の可能性を感じたとの感想を持った。

後半の研修では仮想現実 (VR) や拡張現実 (AR) といった技術を使ったテクノロジーの紹介が多数あった。普段目にすることができない技術に教職員は興味関心を持ち、この技術が教育にどのような影響を与えるか、特別支援学校の児童生徒の指導に有効ではないかなど意見が多く出た。

後日、大学の先生方から質問の回答を得ることもでき、特別支援教育とは違った視点からの学びの機会をもつことができ、お互いにとって貴重な学び合いの時間を持つことができたと考える。

先日は貴重なお時間と機会を頂きありがとうございました。  
また、多くの感想や貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。

ご質問への回答

- プログラミングの目標として、数学的思考が挙げられているが、地場の特別支援学校に  
□ □ 習得している生徒たちの中には、そういった思考を幅広い分野に活用して考えることが  
□ □ 難しい子供もいる。実生活に近い、プログラミングの題材、教材があれば教えてほしい  
□ □ です。
- 特別支援学校での学習の様子が変わらないままお話をさせて頂きました。講演では比較的プログラミング  
を教習教育と認識して説明しやすいことから「対象」を材料にお話をしましたが、プログラミングの  
テーマはいたるところにあると思います。
- 例えば「身の回りの現象や行動をプログラミングで表現してある」です。
- 「番号帳をつくる」をテーマにすれば、色の濃淡や色が変化する時間や順番など、じっくり観察する  
ことが必要であり、仕組みの理解にもつながると思います。同時に「目を覚ませる」や「起きるから家  
を出るまで」を転写するなどに、手順や手順図を作る機会にも繋がります。
- また、「音楽」をテーマにリズムや音の強弱や、「漢字」に部首を関係づけその理解を促すなど、それぞれ  
生徒さんに応じたテーマや視座を考案することが可能であると思います。
- プログラミングや最新技術などで、わりとすぐ実践的に実用化されそうなものがある  
□ □ 知りたいです。
- 私たちが「これ不慣れだな」「こんなのがあつたよ」と思っていることが、すぐ次に、さらに  
思っている以上に高レベルに実用するものがこの現状情報化社会だと思います。AI によりこれらも何が  
どう実用化されるか想像が付きません。
- プログラミング教育や AR/VR 等が盛況している先に、先立方が「こんな状況の中にな  
□ □ らないかな」と思っているところがあるのが、どんな世界が実現したいです。
- 日本語をどう、セキュリティや AI に振り回されない、人間の必要の方で生きていく対象に住み  
たいと思っています。
- 本校教職員が埼玉さんの方になれるのはどんなところか。
- 大学行事 (学園祭・その他イベント) にお越しいただき、イベントを体験、盛り上げていただければ  
と思います。

埼玉工業大学  
情報システム学科  
関口久美子

本校特別支援学校 〇 様

先日は貴重なお時間と機会を頂きありがとうございました。  
また、多くの感想や貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。

ご質問への回答

- **Assistive** や **バーチャルスプレー** は複製版で印刷して行えますが、もう少し実感を知らりたい。  
□ □ 原理上可能ですが、ただし現状ではスプレー型デバイスを 1 個しか製作しておりませんので印刷はし  
ておりません。
- **運動** にあつたような、画像にスマホを照けると動図になるのは、私たちがやろうとすると、複製  
はどのくらいかかるか (プログラミング意図はわからないけど、スマホで動図複製できるくらい  
か)
- 技術的に様々な要素が関わってきますので、なかなか一概に見てもらえない部分ではありますが、プ  
ログラミング言語の習得も含めて、かつ普段のお仕事と並行できるとなると 1~2 年弱くらいはかかるか  
も知れません。
- **VR** の学習の効果、心算、効果など知りたいです。
- 学習と関係させた話についてはあまり詳しくはありませんが、物理現象や数字のグラフなどを「立  
体的に 3D として」観覧できること、また、それを様々な視点から (例えば真横からでも真上からで  
も) 観ることができることは理解の助けにはつながりやすい、ということはお話されています。

埼玉工業大学  
情報システム学科  
船井 政伸

【本校教職員からの質問に対する、埼玉工業大学教職員からの御解答】

## (2) プログラミング教育の実践

主として本校では、実物のパーツやブロック、カードなどを操作しながらプログラミングを行う「タンジブルタイプ」を使用したプログラミング教育を行ってきた。主に先述した「プリモトイズ キュベット」「コード A ピラー」である。

昨年度に引き続き、「プリモトイズ キュベット」を中心に「プログラミングを学ぶ」授業と「プログラミングで学ぶ」授業を行った。児童生徒は新しい教材、やったことのない授業に興味関心を持ち、教員の動作を食い入るように見る姿が印象的であった。活動に入ると、最初は教員の指示に従って取り組む姿が多かったが、次第に自身で機器を持って主体的に取り組む姿も多く見ることができた。

知的障害特別支援学校におけるプログラミング教育の実践は、全国的に見て数は少ないが、学習指導要領でプログラミング教育についての記述もあり、障害を持つ児童生徒に今後実践を積み重ねていく必要がある。その際に、技術の専門家が集う工業大学の力を借りることはとても大きなものであると考える。

## 4 課題と今後の展望

### (1) 課題

今年度は新型コロナウイルスの影響で様々なことが中止に追い込まれ、内容も大幅に変更しての実施であった。大学との連携については、教職員向けの研修会等に留まり、児童生徒に直接かかわる内容に取り組むことができなかった。特に大学との連携については、大学側にとってはオンライン授業、授業や行事の変更等の対応により時間をとることが厳しい状況であった。

また、本校においても休校、分散登校、行事の中止が相次ぎ、通常の教育活動に支障が出る上、感染症に厳重に注意しなければならない児童生徒も在籍しており、最終的にこのような状況になるのはやむを得なかったと考える。

しかし、今年度の状況を踏まえ、次年度以降も続くであろうコロナ禍においてはできることを少しずつ取り組む視点もより考えなければならない。例えば他の活動に切り替える、関係機関と密に連絡を取り合う、オンラインの活用をより積極的に行う等である。このような緊急事態において、もっと早急に他の活動に切り替えることやオンラインを活用した話し合いや活動を取り入れる必要があったと考える。

### (2) 今後の展望

今後も、地域と継続した取り組みを行っていきたいと考えている。本校は県立特別支援学校初めての「コミュニティ・スクール」に指定され、地域や企業との連携を深め、活動を続けている。

本プロジェクトをきっかけに、新たに埼玉工業大学との連携を進め、児童生徒の教育活動をさらに充実させるような取り組みと地域の学校として教育活動を行っていきたい。

地域と連携することで、卒業後、地域で生活するときの支援者や理解者を増やし、共生社会の実現に向けての理解啓発や、地域の学校（小中学校等）で「共に学ぶ」というインクルーシブ教育の推進について、保護者や地域の皆様と一緒に知恵を出し合い、協働しながら児童生徒の成長を支える「地域とともにある学校づくり」を進めていきたい。